

唐武宗期における劉稹^{りゅうしん}の乱と藩鎮体制の変容

新見 まどか

従来「唐宋変革」期として注目を集めてきた唐代中国史であるが、近年はその変動を中華世界のみならず、東部ユーラシア全体の中で考察しようとする潮流が生じている。本稿ではこの関連性を実証的に考察すべく、九世紀半ばに昭義節度使^{しょうぎ}において生じた、劉稹の乱という藩鎮反乱に注目した。この反乱は従来、藩鎮反乱の「例外」とする見方が強かったが、藩帥側近集団の分析により、安史の乱以来の藩鎮反乱の系譜に位置づけることができる。また、朝廷が劉稹の乱討伐を敢行できたのは、当時唐朝北辺に出現していた遊牧帝国ウイグルの、遺民集団の敗走を背景とした。さらに朝廷は、劉稹軍と気脈を通じていた河朔三鎮^{かさくさんちん}との離間策のため、河朔三鎮と世襲に関する取引を実施し、その脅威を除いた。ところが乱終息後の大規模な軍縮によって、却って河南を中心に余剰兵力が放出され、盗賊・密売、あるいは反乱などの動揺が生じたのである。

以上の経緯を踏まえれば、劉稹の乱や河朔三鎮対策、さらに河南の情勢不安といった事象が、唐の国内問題に留まらず、内陸世界の動向と段階に関連していたことが判明する。すなわち安史の乱以来、唐朝は北辺防衛のみならず対河朔三鎮のため、内地にまで膨大な軍事力を抱え込んできた。しかし武宗期、北辺でウイグルが崩壊したので、朝廷は北辺防衛の軍事力を内地の藩鎮反乱討伐に割いた。さらにこの藩鎮反乱の中で唐朝廷は、河朔三鎮の安静化をも実現した。こうして、唐朝の軍事的脅威は内外ともほぼ同時に消滅した。そこで朝廷は、一見不用となった内地藩鎮の軍事力縮小に乗り出した。その結果、行き場を失った多くの兵員は、国内の不穏分子へと変貌してしまった。劉稹の乱は、草原の遊牧帝国崩壊の余波が、唐朝北辺から太行山脈を越えて河北へと次第に波及し、河南の混乱の遠因となった、九世紀半ばの情勢変化を象徴する出来事だったといえる。